様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４３０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２５７７

研究課題名（和文）19世紀アメリカ文学とテクノロジーの交錯にみるサイエンス・フィクションの原風景

研究課題名（英文）The Original Scenery of Science Fiction in the Intersection of 19th Century American Literature and Technology

研究代表者
中村　善雄（Nakamura, Yoshio）

京都女子大学・文学部・准教授

研究者番号：００３６１９３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、サイエンス・フィクションのジャンルが確立される以前の、19 世紀アメリカ文学を研究対象とし、その中からタイムトラベルやパラレルワールドといった時間と空間の相対化を齎す部分を抽出し、正典的作家のSFジャンルへの位置づけとSF前史の構築を目的とする。具体的には、「象牙の塔」の作家と目されるHenry James と当時の科学思想との関係性を探求すると共に、19 世紀のテクノロジーの波及的影響の大きさとその臨界点を探った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果によって、19世紀のテクノロジーが作品にいかに反映され、SFの発展にどのような影響を与えたかを明らかにすると共に、技術の進歩と文学の相互作用に関する洞察を得ることができる。また19世紀の作品に見られるタイムトラベルやパラレルワールドといったSF的要素が、その時代のテクノロジーの発展や社会の変化にどのように関連していたかを示し、文学と科学が互いに影響し合い、異なる領域の知識やアイデアが相互に交わることで生まれる創造的なシナジーの重要性を見て取ることが可能となる。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on 19th century American literature before the establishment of the science fiction genre, aiming to examine elements that bring about the relativization of time and space, such as time travel and parallel worlds. Its objectives are to extract these aspects and establish the positioning of canonical authors within the SF genre, as well as to construct a prehistory of science fiction. Specifically, it seeks to explore the relationship between Henry James, who is regarded as a writer of the "ivory tower," and the scientific thought of that time, while also investigating the extent and critical threshold of the far-reaching impact of 19th century technology.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：四次元思想　ヘンリー・ジェイムズ　H.G. ウエルズ　タイム・マシン　タイムトラベル　パラレルワールド

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

① 研究の学術的背景

今日のテクノロジーを巡る加速度的進展は、従来 SF の領域と考えられた事象をあり得るべき現実問題として捉える段階にまで達している。その代表例が、Ray Kurzweil が、2045 年に人工知能による人間の知能の超越というシンギュラリティ到来を予測し、そこに誕生し得るポスト・ヒューマンの問題であろう。この問題に対する文学的源泉を求めて、ロマンス的想像力によって喚起されるポスト・ヒューマンの原型を見出す試み、つまり人間／生物とテクノロジーとの接触／融合が文学的想像力を介して、いかなる科学的産物を産出するのかという点にこれまで着目した。しかしテクノロジーの介入が人間／生物を取り巻く時間／空間や過去、歴史、記憶をいかに変容させるのか、その視点が欠落していた。そこで本研究課題においては、19 世紀のテクノロジーとの交錯によって、時間や空間が相対化され、過去、歴史、記憶の書き換えや上書きが行われるタイムトラベルやパラレルワールドをキーワードに考察することにした。これらの概念は現在ファンタジーや SF 上の概念と見做されるが、理論物理学の世界ではその可能性について実際に検討されている。タイムトラベルについては、ワームホールの存在やブラックホールの利用、超光速理論に基づく実現可能性が究明され、パラレルワールドに関しては量子力学における多世界解釈やベビーユニバースといった仮説が提唱されている。この理論物理学の先端的な研究成果も視野に入れながら、作家の文学的想像力によって時間／空間の越境による人間の意識がいかなる影響を与えるのかを検討したいと考えた。

周知の通り、SF の定義は 1926 年創刊の Hugo Gernsback 編集の SF 専門誌 *Amazing Stories* に端を発し、以後 SF ジャンルは 1950 年代に黄金期を迎え、60 年代にニュー・ウェーブ SF、80 年代にはサイバーパンクが一世を風靡し、90 年代以降ニュー・スペース・オペラやスチームパンクといったサブジャンルへと多様化している。しかし、それ以前にも SF 的作品は散見され、Gernsback や Paul Valéry は Jules Verne や H. G. Wells と共に Poe を SF 小説のパイオニアの一人に挙げている。実際、*The Science Fiction of Edgar Allan Poe*(1976)といったアンソロジーが編まれ、日本においては巽孝之が Poe の SF 性については精力的な成果を挙げ、最近も『大渦巻への落下・灯台: ポー短編集Ⅲ SF&ファンタジー編』(2015) の編集・解説を担当している。しかし、その中でタイムトラベルが主題と考えられる作品は少なく、*Time Machines: The Best Time Travel Stories Ever Written.*(2002)に収録の“Three Sundays in a Week”(1841) や"A Tale of the Ragged Mountains"(1844)が挙げられているが、マイナーな作品と言える。その他、同様のテーマを主題とする作品には Nathaniel Hawthorne の短編“P.'s Correspondence”(1845) があり、Mark Twain の長編 *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*（1889）は、タイムトラベルによる歴史改変を扱った最初期の作品と考えられる。また、タイムマシーンを利用した最初の例として Edward Page Mitchell の“The Clock That Went Backward”(1881)や, Edward Bellamy の *Looking Backward: 2000-1887*（1888）が挙げられる。

このように 19 世紀アメリカ文学にタイムトラベルや平行世界を扱ったと解釈しうる作品が存在するが、現状その具体的な論考にまで研究が及んでいない。H. Bruce Franklin の *Future Perfect: American Science Fiction of the Nineteenth Century: An Anthology* (1995)は、19 世紀アメリカ文学にみる SF 的作品のアンソロジーであるが、Poe や Hawthorne 作品と SF との親和性については解説に留まっている。2015 年出版の *The Cambridge Companion to American Science Fiction* でも、Gerry Canvan と Eric Carl Link 著の“Introduction”の中で、19 世紀のゴシック・ロマンスの SF 的小説として Poe や Hawthorne の短編名を列挙するのみで、実際に論考を加えていない。Jacques Baudou の翻訳『SF 文学』（新島進訳, 2011）では、Mary Shelly と共に Poe を SF 小説の先駆者として挙げているが、Hawthorne や Twain については言及していない。

２．研究の目的

こうした学問的状況の中で、現在・未来の科学的産物のモチーフがそのまま登場する 20～21 世紀のアメリカのポスト・モダン小説や SF 小説を対象とするのでなく、19 世紀のアメリカ文学の中にその萌芽を見出し、従来 SF 小説と見做されなかった作品を SF ジャンルへと回収することを目的の一つとする。また、SF 的世界とは無縁と考えられている作家や作品でさえ、19 世紀中葉に端を発する機械文明の波及的な影響下にあり、テクノロジーと文学的想像力の結合によって、SF 的な装置や仕掛けを作品内に内包しており、その点に着目することで作品解釈の新たな地平の提示と SF ジャンルの多様性を認識することが出来ることを期待した。主として 19 世紀のキャノン的作家の作品をタイムトラベルやパラレルワールドのアイデアが内包されている SF 的作品として解釈し、当時のテクノロジー文化がアメリカ作家に及ぼした影響の強度を検討した。本研究の意義としては、19 世紀の文学作品の SF 的モチーフを顕在化させることで、20～21 世紀のポスト・モダン小説や SF 小説との世界観との接続を図り、19 世紀の機械文明の導入時から現在に至るまでの、文学的想像力を介して、人間がテクノロジーをいかに利用しうるのか、その可能性を検討する通時的研究に寄与することを期待した。そこで本研究では、これまで論じられなかった James 作品の SF 的解釈を一つのケーススタディとして取り上げている。Northrop Frye は、*Northrop Frye's Late Notebooks,1920-1990: Architecture of the*

Spiritual World.(2000)の中で、長編 *The Sense of the Past* はタイムトラベルの先駆的作品、短編"The Jolly Corner"はパラレルワールドの物語との覚書を残しているが、具体的な論考には至っていない。しかし Wells の *The Time Machine* (1895)出版の 5 年後、この作品の翻案を執筆すると Wells に James は返答しており、これを前提条件として、当該作品を James 流のタイムトラベル物語として解釈する予定である。一方、"Jolly Corner"については、*The Turn of the Screw* と共に、所謂「幽霊もの」として名高い作品であるが、国籍離脱者たる主人公 Spenser Brydon がアメリカに住み続けたオルターエゴと対面するこの物語を、if の世界を描くパラレルワールドの物語として読み直すこととした。

３．研究の方法

基本的な研究方法は国内外にて資料収集を行ない、原稿を執筆し、それを学会あるいは研究会にて発表し、他の研究者のアドバイスや意見を参考にして、フィードバックを行ない、最終的には学術論文あるいは共著という形で研究成果を公開した。以下はその具体的な方法及び内容である。

①本研究課題に関連するアメリカ文学作品及び SF に関連する図書を購入し、また対象作家との関わりを歴史的側面から考察するために書簡、伝記等の資料文献を収集した。

②入手が困難な図書や本務校にて所蔵されていない雑誌論文等を入手するため、本務校の複写サービスや図書貸借サービスを利用したり、国内主要大学図書館に赴き、資料収集を行なった。

③国内では入手困難な一次資料の収集及び本課題に関する直接的な検証については海外（研究機関）にて行なった。2018 年には夏季休暇を利用して、アメリカ・ボストン、特にハーバード大学のホートン図書館とワイドナー図書館を中心に一次資料の閲覧及び関連論文の収集に努めた。コロナ禍のため当初の計画よりその機会は少なくなったが、2022 年度の春季休暇にも、同大学に赴いた。ホートン図書館では、後述する四次元思想の中心的立場にあった Charles Howard Hinton と William James との間で交わされた書簡や Hinton の William James の *A Pluralistic Universe* に対する影響に関する一次資料を収集した。またワイドナー図書館においては、四次元思想に関する、特に 19 世紀アメリカ文学への影響を論じた論文や Henry James 作品と四次元思想との関係性を知る手掛かりとなる論文の蒐集を行なった。

④研究の諸段階において、研究成果を所属学会にて発表し、他の研究者からの意見やコメントを参考にフィードバックを行ない、執筆中の論文に修正・変更を加え、更なる内容の充実を図っていった。

４．研究成果

① 20 世紀前後の時間と空間の相対化を巡る思想

Christopher Herbert の著書 *Victorian Relativity: Radical Thought and Scientific Discovery* (2001)の書名が物語るように、19 世紀はダーウィンの進化論に象徴される絶対性が問われる時代であり、時間と空間の相対性もその一つで、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて四次元を巡る思想が流行した。四次元といえば、当時特許庁の審査官であった Albert Einstein が 1905 年に発表した相対性理論が挙げられるであろう。それはニュートン力学による絶対時間や絶対空間を否定し、三次元空間と一次元の時間を結びつけた四次元時空、いわゆるミンコフスキー空間を取り扱っている。しかし、Einstein の相対性理論以前に、その理論とは直接関係のない、四次元世界を巡る思想が、数学、物理学、哲学、心理学、心霊学といった観点から論じられ、知的流行と化した。

四次元思想と一口に言っても、それは諸学問の領域から検討されたがゆえ、その中身も多岐に渡る。相対性理論は光速度不変の原理を基盤として、時間の遅れと空間の歪みを物理学的に説明したが、それ以前から、時間を四つ目の次元として考えるアイデアは存在していた。1895 年に H. G. Wells が *The Time Machine* でおよそ 80 万年の未来へと時間を先んじたのはその一例であろう。四次元時空とは異なり、四つ目の次元を空間と見なす四次元空間の概念も存在した。高次元的空間を認識することで「高次の意識」を進化させようとする考えが生まれ、Linda Henderson はそれを「超空間哲学」と呼んでいる。この代表的な論者には、Rudolf Steiner や P. D. Ouspensky らの名前を列挙できるが、彼らに大きな影響を与えたのが、Einstein 同様、特許庁の審査官の職にも就いたことのある数学者 Charles Howard Hinton である。Henderson は、「超空間哲学」のパイオニアとして Hinton を位置づけ、Hinton の著書 "What is the Fourth Dimension?" (1880)や"A New Era of Thought" (1888)が、四次元空間を理解するための実際的な手立てを提供していると論じている。アルゼンチンの作家 Jorge Luis Borges は、SF 分野におけるヒントンの文学的先駆性を評している。同じく高次元への認識を主題とした風刺小説 *Flatland: A Romance of Many Dimensions* (1884) を執筆した Edwin Abbott の存在も忘れてはなるまい。四次元思想の中には、幽霊や亡霊といった純粋科学では説明できない超自然現象を多次元の枠組みで説明しようとする動きもあった。Arthur Bostwick は"Four-Dimensional Space" (1896)の中で、「霊が肉体から離れたとき、単にそれは次元の条件から自由になるという方がありうることである」と述べ、幽霊を三次元とは異なる次元の産物と関連付けた。このように、四次元思想の内容は多岐に亘る。世紀末にかけて将来に漠たる不安を抱えた時期に、不可

解・不可知なものへの理解や新しい知の地平の表象として四次元というテーマが諸学問の領域から論じられたのである。

② 知的サークルにおける四次元思想の文学的影響

様々な学問的領域で沸き起こった四次元思想は知識人の間で議論を呼び、Henry James の居所であったイギリスのライ近辺に形成された知的グループも例外ではなかった。このコミュニティには James の他に、Joseph Conrad、Ford Madox Ford、Stephen Crane、H. G. Wells らの文学者が参加しており、四次元思想が彼らの間で議論の的となると同時に、各作家の文学的想像力を喚起した。Conrad と Ford が共作にて四次元世界を主題とした *The Inheritors* を 1901 年に発表したのはその一例である。それ以上に有名なのは、同じグループに属していた H. G. Wells の一連のサイエンス・フィクションであろう。特に Wells の代表作である *The Time Machine* には、主人公の時間旅行家と友人たちとの議論を通じて、当時の四次元思想の諸相とその影響が見て取れる。まず、時間旅行家は「実際、四つの次元があって、そのうち三つを空間の次元、四つ目を時間と呼んでいる」と、四次元時空のモデルを提示している。時間旅行家の四次元を巡る解説はそれに留まらない。彼は四次元の幾何学を話題にする中で、アメリカの著名な天文学者で数学者の Simon Newcomb を引き合いに出している。Newcomb は“Modern Mathematical Thought”（1894）の中で、「四番目の次元に空間を加えてみなさい、そうすれば相互に無限数の宇宙が並ぶ余地があります」と論じ、四次元空間の存在を主張している。その他にも、時間旅行者が友人にタイムマシンを披露した時、友人である医者が「これはトリックなのか？前のクリスマスのときに僕たちに見せてくれた幽霊みたいに？」と疑問を発し、心霊研究の視点から四次元思想が論じられていた事実が反映されている。このように、時間旅行家と医者や心理学者らのやり取りはまさに知識人たちの間で交わされた四次元思想の多様性を反映している。

同じ文学サークルに属していた James も、四次元思想とは無縁ではない。Joan Richardson は、四次元や時間に関するトピックは、James が常連の寄稿者であったレビューやジャーナルで扱われ、従来の空間や時間や知覚の概念への重要な挑戦を James は知っていたと指摘している。Elizabeth Throesch によれば、James が Hinton の著作を読んだ確証はないが、兄 William James と Hinton はイギリスの哲学者でプラグマティズムの先駆者 Shadworth Hodgson を介して知り合い、1892 年から 1907 年の間に 11 通もの書簡のやり取りがあり、Henry も Hinton の考えに通じていたことを指摘している。Throesch はまた Henry が、親しき友人 George du Maurier の、四次元を扱った作品 *The Martian* (1897)の書評をした事実を挙げている。

③ 四次元思想と『過去の感覚』の関係性

ライに集った文学者たちに与えた四次元思想の影響を Henry James の作品のなかで考察するため、彼の最晩年の未完小説 *The Sense of the Past* を取り上げた。この作品は Donna Przybylowicz の言葉を借用すれば、「ナラティヴの迷宮」の様相を呈し，ジェイムズ作品中でもとりわけその晦渋さで際立っている。同時に「迷宮」と化した語りを紐解かんと、従来ナラトロジーの視点から多くの考察が試みられてきた。しかしこの作品の内容は、1910 年を生きる主人公ラルフ・ペンデルが、彼と瓜二つの 1820 年を生きる彼の分身と立場を入れ替え、過去の世界へとタイムスリップし、分身の世界を体験する物語であるがゆえに、タイムトラベル物語としても解釈し得る。しかるにサイエンス・フィクションの系譜に *The Sense of the Past* が位置付けられることもなく、そのサイエンス・フィクション性もほぼ研究対象とならず、その時代的・思想的背景についての考察も不十分なのが現状である。

先述したように、Henry James は兄 William を通じて Hinton の考えに接しており、なおかつ Conrad と Ford の例にみるように、Wells との執筆の協同作業も持ち掛けている。Wells に宛てた手紙では、彼の SF 小説への賛辞と共に、Wells の作品の書き換えを示唆している。その後、別の書簡では、2 人の協同作業が、Wells の作品の質の向上を図ることを確信している。しかし Wells の後見人を自任していた James の申し出は断られ、彼は協同作業の代わりに、Wells 作品と同じく時間の相対化をテーマとした作品執筆を示唆しており、その成果が *The Sense of the Past* と言える。しかし、Wells の *The Time Machine* が 80 万年先の未来を志向するのに対し、James の場合は、過去へと遡り、時間の志向性は全く正反対である。この過去志向は、14 年に亘る *The Sense of the Past* 執筆中断の間に James に起こった出来事と無縁ではなく、1904 年に 21 年ぶりにアメリカを再訪した James はその劇的変化を眼にし、同一の場所が異なる世界へと変化するタイムトラベル的経験と無縁ではない。あるいは老境に差し掛かった James が自らの過去を振り返るため自身の少年・青年期の自伝的作品を出版したことや、第一次世界大戦の悲惨な現実からの逃避を願い、過去への思慕を募らせたことが、*The Sense of the Past* における過去へのタイムトラベルに反映されている。

The Sense of the Past の SF 性に眼を転じると、自伝的作品にて家の扉が過去の回想の入り口になるように、この作品でも家の扉を介してラルフは 1810 年の世界へと遡り、家が時間の相対化を齎す特異なトポスと化している。時間だけでなく、その家では空間的な次元の揺らぎも発生しており、1820 年を生きるラルフの分身が自身を描いた肖像画から抜け出て、３次元の姿でラルフに対峙し、そこに Abbott や Hinton の文学的影響を見て取ることができよう。さらに 1820 年に遡ったラルフが分身の歴史を変更しようとする際には、分身はラルフの歴史改変を制

止する姿勢を見せ、歴史変更を許さないタイム・パトロールの役割を担っており、*The Sense of the Past* には SF を構成する諸要素が散見できる。本課題ではこれらの問題点に着目することで、この未完小説を Wells の SF に対する James 流の書き換えであることと、プロト・サイエンス・フィクションとして位置づけることを試みた。

④四次元思想と『懐かしの街角』の関係性

Northrop Frye がタイムトラベル物語として挙げた *The Sense of the Past* と共に、パラレルワールドの物語と表した"The Jolly Corner"も、時間や空間の相対化をテーマとする作品であり、両作品はある意味、一卵性的関係を有している。*The Sense of the Past* は、William Dean Howells の依頼によって執筆されたが、1900 年頃に執筆が中断されている。その原因の一つとして、タイムトラベル物語に付き物の、歴史改変を許さない「タイム・パトロール」やタイム・パラドックスという問題に直面し、結局執筆再開に至るまで、14 年の歳月が流れた。その中断期間に、*The Sense of the Past* と類似したテーマを、より扱いやすい形で取り組み、結実したのが"The Jolly Corner"と言える。両作品の親和性を裏付けるように、" The Jolly Corner"もタイムトラベル的要素を有している。

先述したように、James は 1904 年にアメリカを 21 年ぶりに再訪し、その時の体験が印象記 *The American Scene* として刊行された。その中で、James は時の経過と共に同一の場所が一変している現実に直面し、記憶のなかのニューヨークと現在のニューヨーク、これは彼にとって時間を隔てた二つの異なる世界として認識された。一方、" The Jolly Corner"は *The American Scene* の「ニューヨーク再訪」の章が世に出た、数カ月後に執筆されており、この短編では主人公スペンサー・ブライドンが、ジェイムズ同様に 33 年ぶりに自分の所有する家を見るためにニューヨークを再訪し、予想だにしなかったこの大都市の目新しさや巨大さに驚きを示している。" The Jolly Corner"は、20 世紀初頭のニューヨークを異質とみるジェイムズ自身の意識を如実に反映しており、ブライドンにとっても、ニューヨーク再訪は一つのタイムトラベルと化しているのである。

このように、中断した *The Sense of the Past* を継承する形で、" The Jolly Corner"は執筆され、他にも両作品の設定には類似性がみられる。*The Sense of the Past* が相続した家で 18 世紀に生きる自身の分身と出逢うように、" The Jolly Corner"でもブラインドンが、ニューヨークで生き続けたら、そうなっていただろう自分の分身、つまりパラレルワールドの分身と遭遇する。両作品は過去への好奇心から自身の所有する家にて自らの分身に出くわすというテーマを共有しているのである。

〈まとめと総括〉

SF 的世界と無縁と考えられている作家や作品でさえ、時代の科学的進展の影響を免れることはなく、テクノロジーと文学的想像力の結合によって、SF 的な装置や仕掛けを作品内に内包している。その検討のため、特に Henry James と彼の作品を取り上げた。当時知識人の間で流行した時間と空間の相対化を巡る四次元思想が、彼を取り巻く知的サークルや彼自身の志向や作品のテーマに波及している実態を明らかにすると同時に、従来と異なるオルタナティブ・リーディングの可能性を提示し、作品解釈の新たな地平の提示と SF ジャンルの多様性の認識を導くことを本課題で行なった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 中村善雄	４．巻 30
２．論文標題 「ジャンルの越境と障壁―劇作家ヘンリー・ジェイムズの原風景」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『アメリカ演劇』	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 中村善雄
２．発表標題 「トランスエスニック・ネットワークが結ぶ「アメリカ」／「アメリカ文学」」
３．学会等名 中・四国アメリカ文学会第50回大会シンポジアム
４．発表年 2022年

１．発表者名 中村善雄
２．発表標題 「『自由を求めた千マイルの逃走』と人種／階級／ジェンダーへの問い」
３．学会等名 欧米言語文化学会関西支部フォーラム「人種・民族」
４．発表年 2021年

１．発表者名 中村善雄
２．発表標題 「私的空間のジェイムズと女性タイピスト―現実／想像の声を聞く」
３．学会等名 日本ナサニエル・ホーソーン協会関西支部シンポジウム
４．発表年 2021年

１．発表者名 中村善雄
２．発表標題 Transatlantic Literary Ecologiesを読む
３．学会等名 第 32 回エコクリティシズム研究学会ワークショップ
４．発表年 2019年

１．発表者名 中村善雄
２．発表標題 「劇作家Jamesの誕生― "dramatic years"以前の戯曲」
３．学会等名 日本アメリカ演劇学会第7回シンポジウム
４．発表年 2017年

１．発表者名 中村善雄
２．発表標題 「『アトランティック・マンスリー』にみる文学的潮流―ローウェル、フィールズ、ハウエルズ」
３．学会等名 日本ナサニエル・ホーソーン協会中部支部例会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計10件

１．著者名 真田満、倉橋洋子、小田敦子、伊藤淑子、池末陽子、高橋勤、野口啓子、生田和也、西谷拓哉、城戸光世、里内克己、中村善雄、竹井智子	４．発行年 2023年
２．出版社 彩流社	５．総ページ数 272
３．書名 『19世紀アメリカ作家たちとエコノミー―国家・家庭・親密な圏域』	

1．著者名 植月惠一郎、奥井裕、野村忠央、大森夕夏、加藤良浩、近藤直樹、藤原愛、中村善雄、井内雄四郎、大西章夫、鎌田明子、小林英美、吉田一穂、松本望希、岡田俊之輔、髙坂（本村）徳子、高橋一馬、大石健太郎、横山ミィ子、横山孝一他、計35名	4．発行年 2022年
2．出版社 金星堂	5．総ページ数 636
3．書名 『多次元のトピカー英米の言語と文化』	

1．著者名 鈴嶌梓 浦千里 スミザース理恵 若狭智 吉村征洋 山下雅史 蒐原美和 瀧川宏樹 山口和夫 川田伸道 荘中孝之 谷口義朗 中村善雄 疋田知美 眞城大伎 高橋美帆 古木圭子 立本秀洋	4．発行年 2021年
2．出版社 大阪教育図書	5．総ページ数 361
3．書名 『回帰する英米文学ー時代を生き抜く<学び>とは』	

1．著者名 松本昇、西垣内磨留美、田中千晶、程文清、寺嶋さなえ、ハーン小路恭子、清水菜穂、山本伸、丸山悦子、峯真依子、 小林朋子、井村俊義、大﨑ふみ子、河内裕二、君塚淳一、鵜殿えりか、山田恵、西田桐子、齋藤博次、中野里美、中村善雄他、計32名	4．発行年 2019年
2．出版社 金星堂	5．総ページ数 414
3．書名 『エスニシティと物語り―複眼的文学論』	

1．著者名 白川恵子、竹腰佳誉子、辻祥子、成田雅彦、竹野富美子、倉橋洋子、稲冨百合子、古屋耕平 、髙尾直知、城戸光世、橋本安央、林姿穂、竹内勝徳、本岡亜沙子、中村善雄、貞廣真紀	4．発行年 2019年
2．出版社 彩流社	5．総ページ数 349
3．書名 『繋がりの詩学ー 近代アメリカの知的独立と〈知のコミュニティ〉の形成』	

１．著者名 伊藤詔子、辻祥子、大島由起子、藤江啓子、大野美砂、真野剛、浜本隆三、浅井千晶、塩田弘、岸野英美、林千恵子、荒木陽子、デビッド・ファーネル、中村善雄、日臺晴子、中山悟視、松永京子、原田和恵、芳賀浩一、水野敦子、三重野佳子、深井美智子、牧野理英、一谷智子、巽孝之	４．発行年 2017年
２．出版社 音羽書房鶴見書店	５．総ページ数 436
３．書名 『エコクリティシズムの波を越えて―人新世を生きる』	

１．著者名 貴志雅之、西谷拓哉、西山けい子、中良子、新田玲子、竹本憲昭、古木圭子、常山菜穂子、黒田絵美子、後藤篤、原恵理子、白川恵子、堀内正規、山本裕子、森瑞樹、中村善雄、岡本太助、渡邉克昭	４．発行年 2018年
２．出版社 金星堂	５．総ページ数 386
３．書名 『アメリカ文学における幸福の追求とその行方』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

英文学科教員　最近の研究活動　中村善雄先生（その２）
https://www.kyoto-wu.ac.jp/gakubu/faculty/eibun/news/rhnb3000000143ge.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関